

今こそ、小津の映画を

今年、映画監督・小津安二郎の生誕120周年。東京国際映画祭で特集が組まれるなど、改めて注目が集まった。一方、授業で尋ねると、名前を知る学生は皆無だった。「退屈」「保守的」との声もある。

私も若い頃、小津映画は全くわからなかった。しかし、改めて作品を見直すと、若い頃と全く見え方が違う。最近、深く考えさせられたのは、戦後間もない1951年作の「麥秋」だ。「晩春」「東京物語」とともに、「紀子3部作」と呼ばれる中の1本である。各作品は別々の物語だが、原節子演じるヒロインの名が全て紀子のため、このように呼ばれる。

物語では、28歳で独身の紀子に見合い話もちあがる。相手は商社の常務で、大屋敷をもつ旧家の出身。兄（笠智衆）は大変乗り気だ。しかし結局、当の紀子は、兄の診療所で働く、幼い娘を残して妻を亡くした知り合いの助手との結婚を選ぶ。

興味深いのは、紀子の友人アヤ（淡島千景）が、「いつから好きだったの」と尋ねる場面だ。その質問に対して紀子は、「好きとか嫌いとかじゃないのよ」「信頼できると思ったのよ」と答える。アヤは「それが好きだったことなのよ」と言う。だが紀子は、一貫してアヤの言葉を否定する。このシーンは、一体何を意味しているのか。

まずこの結婚は、兄が見合い相手に喜んだような、世間体や因習にとらわれたものではない。だが紀子は、「好き」という誰もが納得しがちな説明も否定する。なぜか。それは自分が相手を決めたという意志を曖昧にするだけでなく、他人⇨世間もそれで何となく理解してしまう言葉だからだ。紀子は、そのどちらでもない第3の立場を自ら示す。自分が信頼できる人を私自身が選んだのだ、と。この場面は、結婚の問題に留まらず、自立した個の生き方を伝えている。

さて、例えば政治に関して、「前からそうだから」「他人に頼まれた」「皆が良いという」ではなく、「私が信頼できる人を私が選ぶ」ことを私たちはしてきたのか。敗戦直後、そして今も、小津の映画が問いかける。

（静岡文化芸術大教授）